

聞き手

秋山 駿

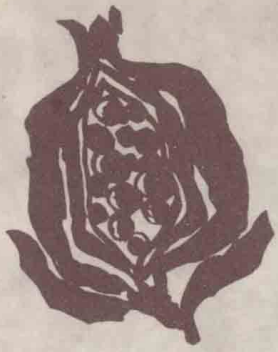
菅野昭正

中野孝次

亀井秀雄

高橋英夫

# 大岡昇平



# わが文学生活

わが文学生活



大岡昇平

わが文学生活

昭和五十年十一月二十日印刷  
昭和五十年十一月三十日発行

著者 大岡昇平

発行者 高梨 茂

印刷 三陽社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六一)五九二一

振替東京二一三四

©一九七五 検印廃止

目

次

略年譜

幼年・少年

15

文学的青春

41

スタンダールとマルクス

77

戦争体験と文学

122

戦後の虚実

155

歴史小説

198

文学生活

215

あとがき

245

装幀 熊谷博人



一九〇九  
明治四二

三月六日、東京市牛込区（現新宿区）新小川町三丁目十三番地に生まれる。和歌山県人、大岡貞三郎・つるの長男。当時、父は茅場町の株式仲買店の外交員、姉文子（明治三七年生れ）は大正元年和歌山市十一番丁の母方の大叔母高村友枝の養女となる。

一九一五  
大正四

六歳 四月、渋谷第一尋常高等小学校入学。一家は大正元年に麻布区筈町一八〇に移り、以後渋谷町伊藤前（水川神社附近）に転居した。一七年、中渋谷八九六に転居。一九年、渋谷大向小学校に転校。前年より従兄洋吉にすすめられて雑誌『赤い鳥』に童謡を投稿し、北原白秋選で入選掲載される。二〇年、株式暴落に際して父が相場を当て、やがて仲買店を持った。

一九二一  
大正一〇

一二歳 四月、青山学院中等部に入學。キリスト教の感化を受け、信仰について父と口論した。夏目漱石、芥川龍之介、志賀直哉の作品を読む。二二年、中渋谷七一六（現松濤二丁目十四）に転居。

一九二五  
大正一四

一六歳 一二月、成城第二中学校四年に編入。翌二六年、学校が七年制高等学校に昇格したことによって、自動的に高等部に進む。同級に富永次郎、古谷綱武、安原喜弘等がいた。二七年八月、富永次郎の兄の遺稿『富永太郎詩集』（家蔵版）が刊行され、ランポー、シモンズを読む。フランス語を学ぶことにして、アテネ・フランセに通う。

一九二八  
昭和三

一九歳 二月、成城高校の国語教師村井康男の紹介で、東大在学中の小林秀雄からフランス語の個人教授を受け、ボードレールの「パリの憂鬱」やリヴィエールの「エチュード」を読んでもらう。小林の紹介で中原中也を知り、更に中原を介して河上徹太郎、今日出海、中島健蔵、佐藤正彰等と知る。

一九二九

一〇月、校友会誌『城』二号に、リヴィエール「セザンヌ」を訳載。  
二〇歳 二月、『城』三号にネルヴァルの詩三篇を訳載。四月、京都帝国大学文学部文学科に入學。

昭和四

仏文専攻。同人雑誌『白痴群』創刊に参加。クロードル「ランボオ」を訳載。同人は中原中也、河上徹太郎、村井康男、阿部六郎、内海誓一郎、古谷綱武、富永次郎、安原喜弘。

一九三〇

昭和五

二月、下北沢二四六に転居。四月一七日、母つる歿。『白痴群』第六号で廃刊。

一九三一

昭和六

二月、満州事変による株式暴落で父が破産する。

一九三二

昭和七

二月、京大を卒業。卒業論文はジツドの「賈金つかい」。徴兵延期のため言語学科に入學。四月、パラチフスにかかり、広尾日赤病院に入院、五月末退院して第二次徴兵検査を受け、第二乙となる。京大言語学科を中退。一〇月、『作品』に文芸時評「横光利一氏の『母』」を發表。以後、同誌に論文を發表。

一九三三

昭和八

二月、スタンダール『パルムの僧院』を読む。三月、弟保歿。

一九三四

昭和九

四月、国民新聞社に入社、学芸部勤務のうち社会部に移る。五月、長篇小説「青春」を『作品』に連載（三回で中絶）。スタンダール「アンリ・ブリュラール伝」の翻訳をする、未完。

一九三五

昭和一〇

三月、国民新聞社を退社。小林正とともに『スタンダール選集』（竹村書店）を編集。

一九三六

昭和一一

三月、鎌倉屬ヶ谷の米新亭に下宿。近くに小林秀雄の家があった。六月、「スタンダール」、七月、『赤と黒』スタンダール試論の二を『文学界』に発表。

一九三七

昭和一二

八月、父貞三郎歿。東京に帰り、家産を整理する。六月、チャーチル『世界大戦』の書評（『文学界』）。

一九三八

昭和一三

三月、ふたたび鎌倉の米新亭に下宿。十一月、日仏合弁の帝國酸素株式会社に翻訳係として入社し、神戸に赴任。同人誌『鞆』を編集、「ハイドン伝」「アンリ・ブリュラール伝」（それぞれ

一部)を訳載。

一九三九 昭和一二 四月、アランの『スタンダール』を翻訳し創元社より刊行。一〇月、上村春枝と結婚。神戸市兵庫区夢野町、のち灘区上野通八丁目一二番地に住む。

一九四〇 昭和一五 六月、「マキアヴェルリ『君主論』」の書評(『文学界』)。

三二歳 二月、長女柄給生まれる。五月、スタンダールの『ハイドン』を翻訳し創元社より刊行。

三三歳 十一月、ティボーデの『スタンダール伝』を翻訳し青木書店より刊行。

一九四二 昭和一七 六月、帝国酸素株式会社を退社。七月、長男貞一生まれる。十一月、川崎重工業株式会社に入社。艦船工場資材課勤務。

一九四三 昭和一八 二月、東京事務所勤務となり、単身赴任。三月、教育召集を受け、東部第二部隊(近衛第一連隊)に入営。五月、バルザックの『スタンダール論』を翻訳解説し小学館より刊行。六月、教育召集解除、同時に臨時召集となり、フィリピンに送られる。第五師団三五九大隊(大藪隊)西矢中隊に所属、ミンドロ島サンホセの警備に当る。一二月、米軍サンホセに上陸。山中に退避する。

一九四五 昭和二〇 一月、米軍に露营地を襲われ俘虜となり、レイテ島収容所に送られる。一二月、明石市大久保町の妻の疎開先に復員。川崎重工業株式会社を退社。

一九四六 昭和二二 五月より六月にかけて「俘虜記」執筆、小林秀雄主宰の『創元』第二号に掲載予定だったが、文中米兵に関する記述があるため発表の見込みがなかった。スタンダール『恋愛論』を翻訳。

一九四七 昭和二三 一月、中原中也伝の資料調査のため、山口市の中原家を訪問、同時に富永太郎の資料を集め始める。スタンダール『パルムの僧院』を翻訳。八月、創元選書『中原中也詩集』を編集解説。

一四四八  
昭和三

三九歳 一月、家族とともに上京、小金井町の富永次郎方に寄寓する。二月、「浮虜記」を『文学界』に、四月、「サンホセ野戦病院」を『中央公論』に発表。以後五年一月まで「浮虜記」連作を各誌に発表する。『恋愛論』上巻を創元社より刊行。八月、「レイテの雨」を『作品』創刊号に発表。一月、「恋愛論」下巻を創元社より刊行。鎌倉雪ノ下の小林秀雄方に転居。一二月、「野火」1を『文体』第三号に発表、「浮虜記」を創元社より、『パルムの僧院』上巻を思索社より刊行。

一四四九  
昭和四

四〇歳 一月、「浮虜記」により横光賞を受賞。三月、「生きている浮虜」を『作品』第三号に、「戦友」を『文学界』に発表。四月、明治大学文学部仏文科講師（五六年三月まで）。六月、鎌倉極楽寺一〇八に転居。付近に中山義秀、中村光夫がいた。七月、「野火」2を『文体』第四号に、八月、「中原中也伝―搖籃」を『文芸』に発表。一〇月、創元選書『富永太郎詩集』を編集解説。一二月、『続浮虜記』を創元社より刊行。中村光夫、福田恆存、吉田健一、吉川逸治らの「鉢の木会」に加わった。四一歳 一月、「武蔵野夫人」を『群像』に連載（九月完結）。「出征」を『新潮』に発表。一〇月、「妻」を『別冊文芸春秋』に、一二月、「歩哨の眼について」を『文芸』に発表、『武蔵野夫人』を講談社より刊行。

一四五〇  
昭和五

四二歳 一月、「野火」を書き直して『展望』に連載（八月完結）。『新しき浮虜と古き浮虜』を創元社より刊行。中村稔らとともに『中原中也全集』三巻を編集し、創元社より刊行。

一四五二  
昭和七

四三歳 一月、「酸素」を『文学界』に連載（五三年七月完結）。二月、「野火」を創元社より刊行。五月、同書により読売文学賞を受賞。七月、評論集『詩と小説の間』、一二月、合本『浮虜記』を創元社より刊行。

一四五三  
昭和八

四四歳 二月、「化粧」を『朝日新聞』に連載（八月完結）、大磯町東町一丁目一九番地に転居。八月、「保成峠」を『文芸春秋』に発表。一〇月、ロッキンフェラー財団の奨学金を受けて渡米、エール大学の研究生となる。一二月、評論集『わが師わが友』を創元社より刊行。

一九五四  
昭和一九

一九五五  
昭和三〇

一九五六  
昭和三一

一九五七  
昭和三二

一九五八  
昭和三三

一九五九  
昭和三四

一九六〇  
昭和三五

一九六一  
昭和三六

四五歳 五月、ヨーロッパに渡り、パリを根拠にイギリス、オランダ、オーストリア、イタリアを回る。「留学生の手記」を『新潮』に連載（二月完結）。二月、帰国。

四六歳 五月、「ハムレット日記」を『新潮』に連載（一〇月完結）。七月、「沼津」を『文芸春秋』に発表。『酸素』（第一部）を新潮社より刊行。

四七歳 一月、「二詩人」を『群像』に発表。以後九月までに中原中也の伝記「朝の歌」を各誌に発表する。二月、紀行『ザルツブルクの小枝』を新潮社より刊行。

四八歳 一月、「水」を『群像』に発表、「雌花」を『婦人公論』に連載（一二月完結）。二月、「雲の肖像」を三社連合に連載（二月完結）。この年、「野火」がイギリス、アメリカ、イタリアで翻訳される。

四九歳 一月、「作家の日記」を『新潮』に連載（六月完結）。「現代小説作法」を『文学界』に連載（五九年二月完結）。八月、「花影」を『中央公論』に連載（五九年八月完結）。一〇月、中村光夫、福田恆存ら「鉢の木会」編集による同人季刊誌『聲』を丸善から刊行し、「富永太郎の手紙」を連載（六〇年一〇月完結）。一二月、「朝の歌——中原中也伝」を角川書店より刊行。

五〇歳 一月、「野火」が大映で映画化された（市川崑監督）。

五一歳 一月、「逆杉」を『群像』に発表。六月、短篇「サッコとヴァンセッチ」を含む裁判物語集『扉のかげの男』を新潮社より刊行。七月、「微光」を『新潮』に連載（六一年六月未完）。「歌と死と空」を『報知新聞』に連載（六一年三月完結）。一〇月、虎の門病院に入院、胆嚢剔除手術を受ける。

五二歳 一月、「常識的文学論」を『群像』に連載（一二月完結）し、「蒼き狼」をめぐって井上靖と歴史小説論争を行う。四月、『アマチュアゴルフ』をアサヒゴルフ出版局より、五月、『花影』を中央

公論社より刊行。六月、裁判小説「若草物語」を『朝日新聞』に連載（六二年三月完結）。十一月、『花影』により毎日出版文化賞、新潮社文学賞を受賞。

一 九六二  
昭和三七

五三歳 一月、『常識的文学論』を講談社より刊行。三月、「ニセモノのウシロメタサ」を『毎日新聞』に発表、佐伯彰一と論争した。六月、ソヴィエト作家同盟の招きで、芹沢光治良とともに、横浜より船でソ連へ向う。帰途ヨーロッパを廻って九月末帰国。七月、「大衆文学再批判」を『群像』に発表し、海音寺潮五郎と論争。『文壇論争術』を雪華社より、八月、『現代小説作法』を文芸春秋より、『歌と死と空』を光文社より刊行。一〇月、帰国後、胃潰瘍のため吐血、虎の門病院に入院。退院後作曲とピアノを始める。

一 九六三  
昭和三八

五四歳 一月、「戦後文学は復活した」を『群像』に、五月、「ソ連紀行」を『文芸』に連載（七月完結）。一〇月、「拳兵」を『文芸春秋』に、「天誅」を『小説新潮』に発表。『文学的ソヴィエト紀行』を講談社より刊行。十一月、「天誅組」を『産経新聞』に連載（六四年九月完結）。一二月、「吉村虎太郎」を『世界』に発表。

一 九六四  
昭和三九

五五歳 三月、日中文化友好協会の幹旋により三週間、中国旅行。北京、西安、上海を回る。五、六月、「文学的中国紀行」を『中央公論』に発表。

一 九六五  
昭和四〇

五六歳 一月、叔母蔦枝歿。「将門記」を『展望』に、六月、「叔母」を『群像』に発表。山口市に建設された中原中也詩碑除幕式に出席。

一 九六六  
昭和四一

五七歳 一月、「在りし日の歌——中原中也の死」を『新潮』に、四月、「母六夜」を『群像』に発表。五月、スタンダール『赤と黒』を脚色し、日比谷芸術座で東宝現代劇により上演。歴史小説集『将門記』を中央公論社より刊行。富士山麓鳴沢村に山荘を建てる。

一 九六七  
昭和四二

五八歳 一月、「レイテ戦記」を『中央公論』に連載（六九年七月完結）。『遙かなる団地』を劇団「雲」により都市センターホールで上演。三月、フィリピン戦跡訪問団に参加。レイテ島、ミンドロ島を再

訪。九月、『在りし日の歌——中原中也の死』を角川書店より刊行。一〇月、『中原中也全集』五巻・別巻一を中村稔、吉田熙生とともに編集し、角川書店より刊行。

一九六九  
昭和四四

六〇歳 一月、『原稿用紙』を『文芸』に発表。四月、『中原中也(1)』を『季刊芸術』に発表。六月、『愛について』を『毎日新聞』に連載(一二月完結)。七月、『レイテ戦記』完結。『昭和文学への証言』を文芸春秋より刊行。大磯の家を引き払い、河口湖の夏の家に移る。八月、『ミンドロ島ふたたび』を『海』に発表。一〇月、世田谷区成城七の一五の二二の新居に入る。一二月、短篇集『ミンドロ島ふたたび』を中央公論社より刊行。

一九七〇  
昭和四五

六一歳 一月、『青い光』を『婦人公論』に連載(七一年九月完結)。四月、早稲田大学政治経済学部で二年間「文学論」を講義。六月、『愛について』を新潮社より刊行。一二月、語りおろし『戦争』を大光社より刊行。

一九七一  
昭和四六

六二歳 一月、『焚火』を『新潮』に、『マテオ幻想』を『文学界』に発表。『定本富永太郎詩集』を中央公論社より編集刊行。「わが生涯を紀行する」を『潮』別冊(五月『日本の将来』と改題)に連載(七二年一月完結)。二月、富永太郎詩画展を西銀座「ギャラリー・ユニバース」で開催。七月、短篇集『母六夜』を新潮社より刊行。八月、ユネスコの招きによりフィンランドに出発。九月、ヘルシンキにて「伝統と現代」を講演、パリ、コルシカ島を回る。『レイテ戦記』を中央公論社より刊行。一〇月、帰国。芸術院会員を辞退。

一九七二  
昭和四七

六三歳 一月、『コルシカ紀行』を『海』に連載(五月完結)。『レイテ戦記』により毎日芸術賞を受賞。四月、メキシコに出发、長男貞一が滞在中のニューヨークを回り下旬帰国。五月、『凍った炎』を講談社より、『私自身への証言』を中央公論社より刊行。七月、『萌野』を『群像』に連載(七三年三月完結)。一二月、『コルシカ紀行』(中公新書)、対談集『戦争と文学と』を中央公論社より刊行。六四歳 一月、『漱石と国家意識』を『世界』に、以後、おりに触れて漱石に関する講演を行う。三

一九七三

昭和四八

月、D・キーンとの対談集『東と西のはざままで』を朝日出版社より刊行。四月、「少年」を季刊『文芸展望』に連載。五月、『幼年』（わが生涯を紀行する）改題）を潮出版社より、七月、『わがスタンダード』を立風書房より刊行。一〇月、「過去帳」を『文芸』に発表、十一月、『大岡昇平全集』全十五巻を中央公論社より刊行。講演集『作家と作品の間』を第三文明社より刊行。

一九七四  
昭和四九

六五歳 一月、『中原中也』を角川書店より刊行。三月、右眼白内障手術をうける。五月、「ルパン島」の悲劇』を『中央公論』に発表、『天誅組』を講談社より刊行、文芸レコード『中原中也の世界』を中央公論社より編集刊行。作曲「雪の宵」「夕照」を収録。六月、「歴史小説の問題』を『文学界』に発表。八月、『歴史小説の問題』を文芸春秋社より刊行。九月、『富永太郎——書簡を通して見た生涯と作品』を中央公論社より刊行。十二月、『中原中也』により野間文芸賞をうける。

一九七五  
昭和五〇

六六歳 一月、「問わず語り」を『新潮』に発表。順天堂病院にて右眼補助手術をうける。三月、『大岡昇平対談集』を講談社より刊行。四月、『正岡子規全集』（講談社刊）を正岡忠三郎、司馬遼太郎、ぬやま・ひろしと共に監修する。成城大学経済学部で「外国文学」を一年間講義。六月、「少年」（『文芸展望』の連載を終る。「森鷗外における切盛と捏造」を『世界』（六〇七月号）に執筆。順天堂病院にて右眼補助再手術をうける。七月、「漱石とキリスト教」を『展望』に発表。現代詩文庫版『富永太郎詩集』（思潮社刊）を編集する。八月、『大岡昇平全集』全十五巻完結。

わが文学生活

本書は一九七四年八月十、十一日の両日、河口湖湖畔のホテルで行われた秋山駿、菅野昭正、中野孝次、三氏の質問に対し、大岡昇平氏が答えるかたちで、十四時間にわたって行われた討論の記録である。記録は『海』編集部が速記録を整理し、各発言者の訂正を経て、『海』同年十二月号に発表された。

今回、本書を編むに当って、新たに高橋英夫、亀井秀雄両氏に書面で参加をいただき、大岡氏の回答を加えた。その上で、討論に参加した前記三氏の追加質問、訂正と、大岡氏の回答、再訂正を経て、本書のかたちになった。他に、『海』掲載の際に省いた記録の一部が採用されている。

なお、質問すべき事項について、左記の方々の協力を得ている。古谷綱武、武田泰淳、平野謙、本多秋五、古山高麗雄、尾崎秀樹、加賀乙彦、バーバラ・吉田、磯田光一の八氏（順不同）。関係者すべてに対し、厚く御礼申上げたい。